綾羅の糸も綻ろびて 厚き衣や重からんゅつ ころも おも 春来にけらし白雪の

挙りて踊る楡の精にで はい せい 夜霧に **楡影揺めく鼙鼓の音に** ゆえいゆら こここね 朧々深き五月闇 よぎり L蒸せる緑酒汲みむ。 のよくしゅく

草茅し き焔を囲みつつ げき原始林かげに

若き情熱は求むれど

春宵の罪と誰か言ふ 人生誰かよく解かん 寮友の姿の清ければと も すがた きょ ただ真なる愛に泣く

> 山の端深い あは 永劫の空を眺むれば 今宵銀河の祭日 文月の夢は織女星の なりひゅ 春秋糸も限りなく れ手稲の衣かな くたそがれて 。 の

天空流る星一つ

豊川に聞き 泥潦沈み真清水のでいらうこばましょず 雨 月 の 濁流滔々と 引く世の憂い

流るる秋は見ざるともながる。

七つの海の潮音よ 墳墓の土を清くせん の庭を高らかに

> 杢子 橋爪 秀雄 男君 君 作曲 作歌